

ご あ い さ つ

北海道高等学校教育研究会

会 長 綾 井 健 二

例年になく厳しかった冬もようやく終わりを告げ、春の兆しを感じられるようになりました。

会員の皆様には、平成 7 年度の大詰めを迎え、また、新しい年度の準備のために何かとご多忙のことと存じます。

さて本研究会の本年度の事業につきましては、大きな成果を得て、計画どおり終了することができました。これも会員の皆さまの積極的なご参加をはじめ、運営に御尽力いただいた関係者の方々、ご理解とご支援をいただいた関係諸機関、団体のお力によるものと心より感謝申し上げます。

とりわけ、去る 1 月 10 日、11 日の第 33 回研究大会の開催に当たりましては、稀にみる豪雪という悪条件の中にもかかわらず、3,300 名をこえる参加者がありました。なかには、交通事情の大混乱に巻き込まれ、大変なご苦勞をされながら駆けつけた方も多数あり、その熱意に事務局関係者も感激した次第であります。また、全体集会や各教科部会の運営に当たられた方々も、それぞれ例年にないご苦勞をいただきました。それらのお骨折りや熱意のお陰で、研究大会自体は、充実した内容で、予定通り終了することができました。本当にありがとうございました。

第一日目の全体集会では、河合雅雄氏から、「人間—進化の道からずれた動物」と題するご講演をいただきました。先生は、霊長類研究(いわゆるサル学)の第一人者として著名ですが、人間とは一体どういう存在なのか、いま私たちはどのような地点に立っているのかということについて、極めて重要な視点を示されました。「人間としての在り方生き方に関する教育」の推進がとくに高校段階の生徒には不可欠だとされながら、ともすると、言葉だけの上滑りなものに終わるきらいもあります。その理由の一つには、私たち自身の人間理解の深さと関係があるのではないのでしょうか。その意味で、先生のお話は深い示唆を与えていただくものでした。

また、山中燁子氏からは、「世界のなかの日本と日本人」と題するご講演をいただきました。先生はさまざまな問題を考える際の「バランス」への配慮の大切さ、そして、時代の流れを理解するときの、「地球規模化 Globalization」や「地域化 Regionalization」、「Identity」というキー・ワードを示されました。また、日本を取り巻く国際情勢、さらに、世界各国の生活文化を紹介されながら、私たちの「生き方」(quality of life)を問い直す視点など、豊富な国際活動に裏付けられた具体的なお話を伺いました。いずれも国際化時代の教育を考える重要な視点となるものと思います。

大会 2 日目の教科部会も、それぞれ興味深いテーマの部会講演、意欲的な研究発表など充実した内容でした。私が参加した部会でも、生徒を活動させる思い切った授業実践の発表とこれまでの教育内容を問い直す厚みのある研究発表があり、全道から会員が集まる本研究会のよさを実感しました。

「高教研」は、33 年の歴史を有する全国的にみても有数の研究組織ですが、その運営は、ひとえに会員各位の積極的な参加に支えられています。今後とも、本道の高校教育の充実のために、なお一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

第33回研究大会の報告

日程第一日・全体集会

全体講演・午前の部

〔講演要旨〕

「人間—進化の道からずれた動物」

京都大学名誉教授

河合雅雄 氏

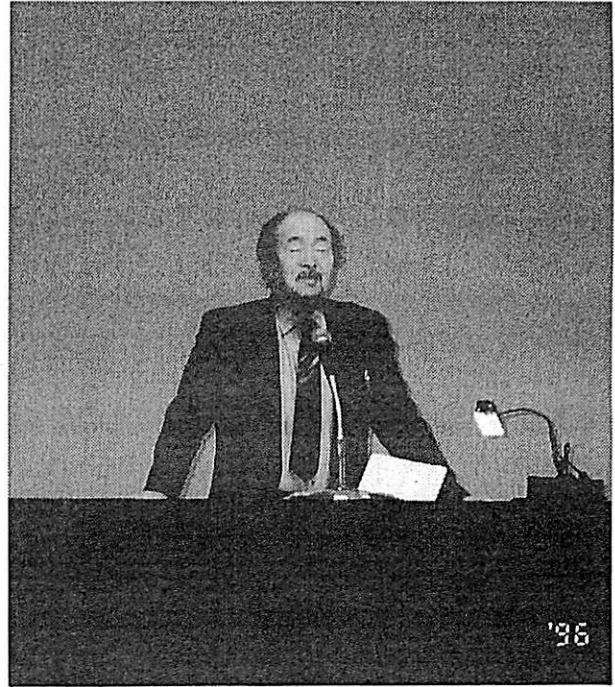
日本福祉大学教授

人間の進化をどう考えたらよいかを今日のテーマとする。人間の進化を知るには猿の研究が不可欠である。一体人間とはどのような生物であるのか、攻撃性・残虐性、文化という二つの問題から考えたい。

すべての生物は必ず死を迎えるが、個体は一つの種の中に存在し、種という命をできるだけ永く保とうとする。その媒介者が性で、遺伝子を残していく。より良い子孫を残していくために生物は優れた雄を選ぶための戦いをする。攻撃性とはあらゆる生物が進化に参与するために備えられているものである。人間も思春期から青年期にかけて攻撃性が高まっていく。抑制の仕方が難しく、家庭内暴力、校内暴力という問題を生じることもある。抑圧しすぎると登校拒否、神経症など自分を損傷する行為に至る場合もある。多くの生物は攻撃性を抑制することが遺伝子に支配されており、生得的に備わっている。例えば日本鹿の雄の大きな枝分かれした角は相手の殺傷を防ぐためのものなのである。

ロレンツによれば生物は「同じ仲間ではできるだけ攻撃しない、殺さない、決して食べない」という掟を持つが、これを破った二種類の動物が、集団を形成した肉食獣と霊長類である。後者は大脳が進化した結果、個体の欲望が増大し、仲間を殺し食べるようにもなった。これは残虐性であり、悪そのものが芽生えたことを意味する。人間はその霊長類を受け継いでおり、進化とは関係のない残虐性を増幅させていった生物である。人間は攻撃性や残虐性の抑制の方法を自分達で作る運命にあった。約束・掟・道徳・制度・組織・宗教・婚姻関係・風習などによって調整しているが、これらは大きな意味で文化的所産と言える。人間は自分達で作ったそれぞれに異なる行動系・生活様式・価値体系を持った民族集団を作っているが、人類全体としてどううまくやっていくのかという非常に大きな問題を抱えている。

環境のカテゴリーとして自然環境と文化環境を考えることができる。文化環境とは自分が創出した制度や宗教、価値観などを指す。人間は長い間この二



つの環境が進化の舞台だったのである。すなわち、人間は五百万年前に猿から分かれて以来ずっと自然・人間・文化が一体となって進化して来た。人間の生活は何百万年もの間変わらずに同じだった。しかし一万一千年前に農耕という大変な事件が起こり、飛躍的に食糧を手に入れられるようになった。文明社会に突入したのである。以来人間は自然に依存する社会から一転して、自然の破壊と改変によって発展して来たが、今では自己を破壊し自己を改変するようにならなくなってしまった。自己破壊とは個体では自殺、集団では戦争であるが、後者は人類全体が減ぶかもしれないという種のレベルにまで及んでいる。自己改変では遺伝子・染色体の操作・借腹・無精生殖・臓器移植・免疫の問題・遺伝子工学など考えれば怖いことが現実のことになろうとしている。

自然環境の中にある猿は一万年後も十万年後も変わらないだろう。しかし猛烈に増大する文化環境の中にある人間は進化の法則の力が及ぼされなくなって、自己改変に突入してしまい、百年後のこともわからないギリギリのところまで来ている。人間はどうあるべきか、どの方向に行くのか、ということを実際に考えなければならない。人間は自然の中で育って来たのだという原点に戻るべきである。

全体講演・午後の部

〔講演要旨〕

「世界の中の日本と日本人」

北海学園大学教授 山中燐子 氏

「現代」の重要な Key word の一つは「balance」であり、諸問題を考察する時には両者のバランスに配慮することが大切である。情報とプライバシー、集団と個人性、男性と女性、知識と感性、仕事と余暇など背反する二つのもののバランスに配慮できることが大切な時代になってきている。

他の重要な Key word は、Globalization と Regionalization とそれらを認識する Identity であろう。Globalization とは、国際化・地球規模化のことであり、その三つの側面とは、一つには意識や視野の国際化、即ち地球の一員としての意識を持つことである。二つめは活動の地球規模化であり、最後のものはネットワーク・システムの地球規模化である。

Regionalization (地域化) とは、地理的・機能的・文化的なものであり、例えば「北方圏」という言葉もあるように、それには重層的発想も必要である。

Identity とは広義の「個性」であり、他との比較から浮かび上がる独自性である。今後、独自性としての個性が増々重要視される時代となるであろう。

我々の郷土「北海道」の identity とは何であろう。「広い」「開放的」などと言われる我々の地域の個性を今一度見直すことも重要である。人と人、国と国の交流という視点からそれを分析することも今後は必要かもしれない。

人口・環境・PKO・経済・人権など国連では将来の問題を解決すべく地道な活動をしている。また、教育の実践にも力を入れている。それは、教育こそが貧困地域の弱者の人権に最も関係するとみなされているからだ。

APEC について言えば、大阪大会で議長国日本に対する各国の批判があったことは残念だった。国際社会に仲間として受け入れられるために何が必要かということを考えることが必要となろう。

少くとも政府は積極的に東アジア地域の主導権を握ろうとはしていない。

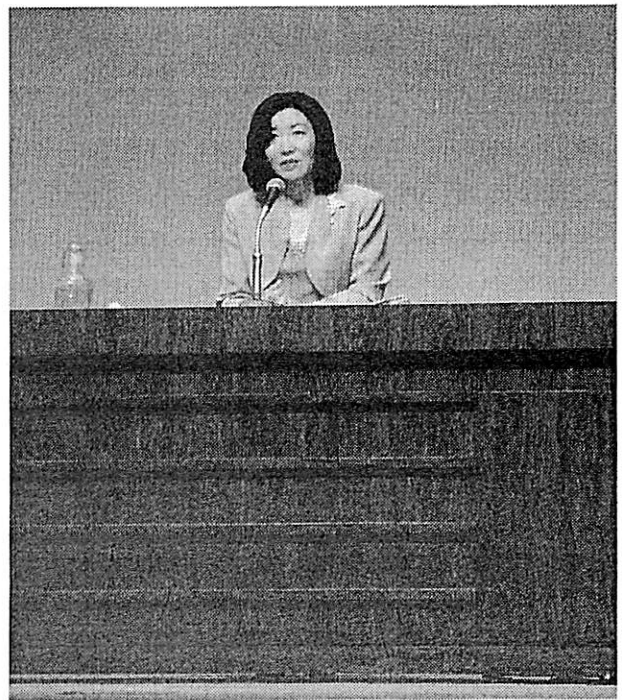
沖縄基地をはらむ日米関係は、二国間だけではなく世界の問題なのだという視点でとらえることも重

要だ。世界の安全保障は against から with の時代が変わったという人もいる。混迷が続くロシアについて述べると、日本の対ロシア経済活動は官民とも韓国や欧州諸国に遅れをとっている。

日本人も今や世界各地で活動しているが、各地で評価を低めている日本人がいることは残念だ。国際社会で配慮の足りない言動をする日本人・日系企業の話を書くことは残念だが、日本はともかく北海道のファンが少なからず存在することも事実であり、うれしい経験もたびたびあった。

中国では日本人ではないと誤解され、とても親切にされたが、日本政府の過去への賢い清算なくしてはいつまでたってもアジアの一員とみなされないと思う。

21世紀へ、「気概」「豊かさ」そして地球の仲間に対する愛などが今後のビジョンと Key word となるであろう。



日程第二日・部会別集会

国語部会

〔講演要旨〕

「言語学習の方向」= 実験授業の試み=

宇都宮大学教育学部教授 長尾 高明 氏
高等学校の学習指導要領が改訂されたが、戦後一貫して、日本語をどう考えるかという教科としては変化はない。では何故「言語教科としての性格を一層明確にし」と言われ続けるのか。言語教材が多くなってきているが、それでは生き生きとはしていないということにある。「日本語の特質」といっても生徒は知っていることばかり。「現代語」という科目が新設されたが広まっていはいない。要領の内容では高校生はついてこない。なぜなら、言葉に関わる学習とは能力とは無縁であるということ。能力ではなくて、その人間の、言語体験の蓄積の度合いで伸びていく。高校生は高校生に応じた志向があるのである。

一方、日本語を学ぶ外国人は、母国語に対してと同じレベルで日本語に問題意識を持つ。例えば「彼に会う」と「彼と会う」の違いなどは、文法的解釈の説明では納得しない。しかし、日本人は質問してこない。母国語は互いになんともなくわかっているから、説明できなくても不便は感じない。私は、これを表現意識の問題と説明する。「に」は、自分の行動に重点を置き、「と」は、自分の行動だけでなく、相手の存在をより強く意識した場合の表現。つまり、表現性の問題までいかないとこの違いは説明できないのである。

このように、日本語を母語としている私達にとつては小学生でも疑問に持たないことを、外国人に質問されると、言語学者ですら答えられない。これが言語のおもしろさ。こういう授業が日本の国語科教育でも大事である。

要するに、言語の学習は生きたものであるべき。言葉の持つ表現性の問題が重要で、日本語の特質を考えていくための手掛かりとして「現代語」の学習は大切である。日本語に関する意識を深めることが一番大事なのである。

以下、現代語の問題点について、古語との比較によって理解を深める、という方法の提唱をいくつかの例示により行いたい。(「形態上の問題」「アスペクトに関する問題」「類義語の比較に関する問題」「意味の細分化に関する問題」等)

付け加えて、「ら抜き言葉」に関し、国語審議会は当分の間は認めないとしたが、調査の結果によると、今や日本人の7割が「見れる」を使っている。文法とは、現実の言語現象を整理する学問である。「見られる」が正しいのは当たり前だが、日本人の7割が使っているのだから「見れる」が間違いと言っても意味がない。

言葉というものは変わるもの。国語学者であっても、あきらめなければならぬ点である。

〔研究発表〕

「国語 I」における理解指導をふまえた表現指導について

～「読み、書き、聞き、話す」言語活動を通した試み～

留萌 栗林 和宏

新しい学力観の一つである、自己の主張を明確に持ち、かつ的確に表現する能力は、今後一層その重要性を増すものと思われる。そこで、教科書教材の「読み」を通して筆者の論旨をたどり、読解するとともに、文章の基本構造や、文章を構成する要素を学び、さらにそれらを自分の文章にいかすという指導を考えた。教授事項を精選し、焦点化し、書く機会をできるだけ増やすとともに、「聞く、話す」分野においても、聞き取り課題や、生徒の意見発表の場を設けるなどして、文章表現だけに片寄らない指導を行った。評価においては、生徒自ら、理解の度合いを把握できるようにした。

新学習指導要領を踏まえた古典指導

～生徒の能動的な学習を目指した「傍釈」授業の試み～

釧湖陵 天内 優

新学習指導要領の趣旨を生かし、生徒の能動的な学習を目指すために、「傍釈」授業を試みている。「傍釈」は古典を単語レベルで学習出来る優れた学習方法であるが、生徒の能動的な活動が阻害されてしまう危険性があるため、あらかじめ生徒がノートに本文、注釈を書き写してきて、板書した事項の中から必要な情報を取捨選択しながら書き込ませるといった方法をとっている。「傍釈」授業の導入から展開に至るまで、実際の授業展開の方法、情報操作を含む板書の徹底した構造化。思考力、表現力を「傍釈」授業を通じて養うための「つぶやきの集約」等、具体的に論述した。

評論文指導における評価の工夫

鹿追 合浦 英則

今日の学校教育には、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」が求められている。そこで、学習の形態に変化をもたせることに加え、日常の評価活動の工夫という観点から、授業の改善を試みることにした。その柱は次の3点である。①明確な到達目標を設定すること。②診断的評価と形成的評価を授業や個別指導に反映させること。③自己評価及び相互評価による学習への動機付けを図るとともに、互いに協力して学習を進める場面を設定すること。形態としては、ポイントとなるところにグループによる討議や相互批評の場面を取り入れ、生徒が主体的に授業にかかわることができるよう配慮した。また、評価については、生徒に成就感、満足感を持たせることをねらいの中心に据えた。

社会部会

現代社会部会

〔講演要旨〕

「マルチメディア時代の展望—教育とマルチメディア—」

NTT北海道支社 マルチメディア推進室長
黒岩 邦夫 氏

マルチメディアとはという定義から具体的な運用、社会全体に及ぼす影響、教育との関わり、そして課題などについて、実際にインターネット回線を会場の教室に臨時に設置し、デモンストレーションを示しながら最新の情報を極めてわかりやすい方法でプレゼンテーションして下さった。

マルチメディアとは①表現メディアの複合②情報のデジタル化③インタラクティブ(双方向)性を特徴とし、それらによりランダムな検索や自己表現を可能にするものである。

コンビニエンス・ストアや通信カラオケにおけるマルチメディアの利用状況など実際の現場の話やインターネットで自分の子どもの名前を募集する父親の話まで、黒岩氏の豊富な経験に裏づけられた講演内容に魅了された。

マルチメディアの最大のメリットは自分の時間軸で仕事ができることである。また世界中の情報を手に入れるために、最低限の英語が書けることとワープロができることの2点が示され終わった。

30名あまりの参加者の中で実際にインターネット

を操作したことのある先生はわずか2名であり滝川高の小野寺先生の言うように「とにかく一度体験することが重要だ」と思った。

〔研究発表〕

(1)実践ディベートマッチ

～公民科教育とディベート学習～

本別 古本 幹彦・木全 正樹

「憲法第九条は改正すべきである」という論題をテーマに両教諭が協議会場でディベートを示したあと、ディベート授業の実践例、問題点・留意的などが発表された。

「評価」に関することが質問されたが、両教諭によると、点数化は難しいが、相手の意見に対する興味・関心や耳を傾けて聴こうとする意欲・態度が生徒たちの中に育まれるようになったということだった。

(2)フィールド・ワーク

～知的総合力を刺激する実感学習～

札幌篠路 塚田 敏信

1982年より始めた自分たちの住む地域についての調査研究活動の実践例が発表された。費用や他クラスとの兼合などが質議されたが、一番の評価は、学校を離れ「社会」の中で生徒たちが地域の人々から様々なことを学びとり、視野が広がっていくことであるということだった。

(3)生徒が主体的に学習する方法について

～職業高校定時制における実践

室蘭工業 今野 博友

「地域の高齢化」をテーマに福祉に関する情報を生徒が主体的に収集、分析そして発信していくという問題解決学習の実践が発表された。

全日制に比べて生徒の学習環境に様々な制限がある中、生徒の学習に対する興味、関心、意欲を引き出し共に学ぶことができたということだった。

日本史部会

〔講演要旨〕

「日本古代対外関係史の成立」

早稲田大学第一文学部助教授 李 成市 氏

現在の我が国における日本古代史、とりわけ、対外関係史の一般認識は、いつ、どのように形成されたのか。また、その認識は、現在、どんな問題を引き起こしているのか、以下で明らかにしていきたい。

1. 古代日本の対朝鮮関係

これに関する従来の理解の前提は、いわゆる「任那日本府」の存在や「広開土王碑文」の解釈などによって根拠付けられてきた、日本による朝鮮半島南部の支配、経営であった。しかし、このような理解は、日清、日露戦争当時の朝鮮半島情勢を古代に投影して形成されたものである。

2. 古代日本の対中国関係

古代中国との関係においても、遣唐使の果たした役割を明治の遣欧使節に擬して考えるなど、近代を古代に投影させる理解が広く一般に普及している。

以上のような、日本古代対外関係史の一般的理解は、古代の中国と近代の欧米を並列視するなど、近代を古代の延長として連続的に捉える理解である。近代以降の国民国家の枠組みで古代を理解するといふ、いわば近代国民国家の「物語」によって、我々の古代史観は形成され、現在も我々の意識を強く拘束している。

このような物語による歴史認識は、他の民族、国家でもなされている。そして、各々の物語は、お互いの垣根を高くしてしまい、相互理解の障害となってしまっている。我々は、この歴史観の起源を自覚し、そこからの開放を目指すべきである。

〔研究発表〕

校外学習（体験学習）「土器作り」の取組み

女満別 木村 仁

本校で取組んでいる校外学習の一環として、生徒を動かし実体験のなかで学ばせようという意図のもと、社会科では「土器作り」を取り入れた。土器の形態・意義についての座学、デザイン画作成などの事前指導を行ってから実際の土器製作に入った。俗にいう学力困難校である本校の生徒たちだが、今回は座学の時点から非常に熱心に取組み、驚くほどの作品を製作する者、自主的に活動する者など、素晴らしい面を見せてくれた。生徒のそうした面を発見できたこと、また、生徒が達成感・充実感・自信を持ってくれたことで、教師としての喜びを改めて感じさせられた。

一国史を超える「高校日本史」試論

札幌開成 西村 喜憲

1989年以降の世界の激動に対し、歴史学や歴史教育は過去をみるにあたっての新しい価値や視点が求められている。これに関し、入江昭氏や李成市氏による国民国家の枠組みを外した歴史という考え方が

参考となる。近代に形成された「国家」の概念にとられず東アジア世界全体から見る前近代史、多くの国の立場から多角的・複眼的にとらえる近現代史など、一国史を超え国際化に対応する歴史教育を試みたい。尚、今後歴史教育は、方法も勿論だが、生徒の「なぜ歴史を学ぶのか？」という問いに答えるため内容そのものの検討もされていかねばならないと考え、努力中でもある。

世界史部会

〔講演要旨〕

「帝国主義について」

北海道大学経済学部教授 加来 祥男 氏
レーニンの「帝国主義論」は今日修正すべき点もあるが、継承すべき点も多い。

帝国主義の時代の特徴は、巨大企業の生成、大衆社会化や社会運動の興隆などの社会の再編、交通革命や貿易の拡大による世界の統合、原料や市場獲得、資本輸出などによる世界の分割などがある。植民地的原蓄やヨーロッパの相対化といった側面もある。

19世紀後半に登場する巨大企業は、従来と同じ構造で巨大化したわけではなく、原料調達から販売等までも行う統合化と複数商品の生産という多角化、所有と経営の分離等の特徴を持つ。

ドイツの重工業は鉄道建設との関わりなどで発展するが、1873年に恐慌を迎え、それ以降大不況となる。価格は下がるが生産は拡大するという悪循環となり、コストアップのための手段として関税の導入と寡占組織（カルテル）が形成された。寡占組織は動揺、変化しながらも、需要の変化等へ対応し経済成長と深い関わりを持つ。

榑井（札幌南）、吉嶺（札幌西）、川音（札幌雲）、山口（札幌岸）、山本（古平）、北村（美唄聖華）の六先生よりの質問を受けた後、運営委員の山口先生が謝辞を述べて講演を終えた。

〔研究発表〕

世界史における絵画教材の利用について

～キリスト教史・ルネサンス史・ロシア史での実践を通じて～

名寄 出口 敬智

授業を創造していくうえで依拠する教材のひとつとして、絵画を利用している。教材としてのメリッ

トは、提示した瞬間に共有できる同時性、見ることにより主体的に参加できる平等性、豊かな物語性をもつと共に絵解きやイマジネーションの自由性などがある。接写により自作スライドを作成する等の工夫を行っているが、テーマや作品の精選・文化史の扱いなどが今後の課題である。

中村(稲西)、斎藤(道工)の二人の先生より質疑があった。

魅力ある授業作りをめざして

＝生徒の興味を生かした授業や

作業学習への取り組み＝

豊富 山賀 智文

授業内容が記号として暗記されることや、苦手な生徒に対する解決方法として、プリントや逸話を利用した授業展開(基本事項の理解と歴史への興味・関心を高める)や、作業学習としての地域巡検の応用「自分で調べる人物・出来事」(問題点もあるが生徒に充実感あり)を実践している。

村井(東陵)今井(美工)田中(平岸)出口の四人の先生より質疑があり、富森(札北教頭)先生より研究発表全体に対する助言を頂いた。

政治・経済部会

〔講演要旨〕

「オウム問題と若者の心」

千葉大学教育学部助教授 諸富 祥彦 氏

オウム事件の背景には、「対人関係を苦手とする世代」の増加があるのではないかと。自分の専門のカウンセリングを通してそれを強く感じる。

オウムは、過保護な大人が子供自身の「人間関係を学ぶ機会」を奪っている状況のなかで、その人間関係に悩み精神的に極限状態に陥った人間に対して「神秘的体験の威力」を巧く利用し、平凡を嫌うという誰もが持つ「アイデンティティへの過剰な反応」をくすぐり、軽薄な現代社会に不信感をもつ「純粋さを求める若者」にまじめに修行をする姿勢をみせることにより、信者を獲得した。

また、事件の解決にあたる権力をそれ自体に対するある種の「嫌悪感」や、宗教的なものに対する妙な「寛容さ」などの世間の風潮も事件を複雑なものにしたように思う。

(質疑) 釧路東の大熊先生の質問に対し、対人関係を苦手とするのは勉強だけができた若者に多いという傾向、札光星の真島先生の質問に対して、教師自身が対人関係の練習をする必要性、「生きがい」を中心に据えた進路指導など現場教師の果たすべき役割についての回答があった。

〔研究協議〕記録

北見仁頃 久保 真理

時事問題を扱う際には、まず事実をしっかりと押さえることが必要であるという観点より、発表者の石田先生からオウム真理教の組織・教義及び教団内での異常的行為等について、またなぜオウム真理教が多く信者を引きつけたのかについて、戦後の復興から現在まで「心の豊かさ」より経済的発展が優先されたことや科学の限界、マスメディアの活用や宗教に無関心な日本の社会などからの分析がなされた。

授業で扱う場合には、「事例として扱うならば自由権的基本権のところであらうが、時事問題はいつ何が起きかわからないという点を考えると、ある単元に固定して考えるのではなく柔軟に対応した方がよいのではないか」「この事件は社会全体の問題として他の様々な問題に関わっており、1人1人が人間としての生き方を見つめていく必要があるのではないか」といった提言がなされた。

後半には教材化するにはどうまとめ生徒へ伝えるべきかという点を中心に、かつて設定されていた「時事問題」という科目や進捗との関係、教員側の意識の問題や「生徒の意志決定能力の育成に意味がある」という視点などについて午前の講師である諸富先生を交え活発な意見交換が行われた。

最後に助言者の荘司先生より「オウム事件に関しては様々な身近な視点で切り込んでいくことが教材化の一歩であり、そこからのディスカッション等を通じて知識と同時に主体的な思考力や身近な問題と関連づけて考えることができる」といった能力の育成がはかられ、人間関係も深めていけるのではないかと。

「時事問題を扱う場合には、時系列的に扱わないと本質的に扱えないのではないかと」といった助言があった。

倫理部会

〔講演要旨〕

欲望の肯定学—個人主義の倫理学

札幌大学経済学部教授 鷲田小彌太 氏

倫理とは、社会の中における“おきて”である。しかし、それを否定してきたのは“欲望”にもとづく個人主義思想であった。そして、歴代の哲学者達は口々に“欲望”はコントロールする必要があるものと唱えてきた。

“欲望”を否定してきた哲学者は、プラトン、カント、マルクス等であり、肯定する立場をとってきたのは、エピクロス、サド、ニーチェ等であった。ただし、肯定派も個人としての欲望は認めるが、大衆全体が欲望を追求し、そして愚かな選択をしてしまうようであれば、社会全体に悪影響を及ぼすであろうと考えていた。

そこで、日本も含めた資本主義社会における“欲望”の存在価値について考えたい。資本主義とは自由競争をたてまえとする。そして、欲望は切っても切れないものとなってくる。欲望とは、もっと楽な暮らしがしたい、もっと上位になりたいという上昇思考のあらわれであり、大量消費社会を支えるものである。だから、社会全体の発展には不可欠なものともいえるだろう。また、欲望とは極めて人間的であり、宗教世界のように自然には存在しない世界を自らの内に築いてきた。欲望は精神世界をも創造してきたといえるのだ。

つまり“欲望”とは人間の管理下には置くことのできないものといえる。そして欲望そのものには善悪はなく、私達自身が良識をもって自己的に処理する必要がある。現代の世界が抱えている多くの問題は、人間の欲望以外の要因がほとんどである。もし欲望を自由にさせるならば、人間自身の、未来永劫幸せでありたいという欲望から社会全体が改善されてゆくに違いない。

今回の研究協議では、研究が2件あった。2件とも、事例を示して、それを生徒が判断する中で論理的思考を養わせる点で共通していた。

〔研究発表〕

「倫理科教育における今日的課題とその指導方法について

～人間の在り方生き方についての自覚を深める
授業とは～

岩内 岩田 昭夫

●最近の生徒は、自分の思考や世界の中に他者が存

在せず、統一した思考や論理性に欠け、自己の価値観が未形成である。そこで、これらの不定している部分を身につけ、人間の在り方生き方についての自覚を深める為、次の実践を行った。

まず、人間の死を扱った作品を7つ生徒に読ませる中で、主人公の行動への各自の判断を下す。次に、全て終わった段階でもう一度自分の判断を再考し、感想を書かせた。

この実践を終えて、生徒から様々な感想が寄せられた。その一方で、年間計画中の位置付けや評価の基準・公正さの点で問題が残された。

「不安」の時代を越えて

札幌南陵 木村 浩

●帰省中に見たNHK教育番組「スーパートーク「不安」の時代を越えて」の内容に共感し、これを精選して以下のような授業を行った。

まず、不安の時代と題して、質問を5つ用意し、6つ目は21世紀に向かって何を希望するのか意見を書かせた。生徒は、身近なところから来る不安を率直に答えていた。そして、将来への希望は、不安が起きない平和な社会を強く求めていることがわかった。

今回のレポートを作りながら、時代の変化の中で絶えず自己を見つめて研鑽を積み、冷静に時代の流れを見極める努力の必要性を痛感した。

以上の研究をもとに、質問・意見が交された。その後、各先生の授業実践について情報交換が行われ、今回の研究協議が終了した。

地理部会

〔講演要旨〕

「現代社会と情報化」

北海道新聞論説委員 本間至能富 氏

講演のテーマは、「情報化がどう進んできたのか、どのように進むのか、それと関わる私達の生活はどう変わっていくのか」についてであった。

昨年の阪神大震災の取材で神戸を訪れた本間氏は、震災と情報について、TVが1番重要な情報伝達手段であったことを指摘。しかし、震災直後の広範囲で正確な情報は遅れたため、政府の対応にも影響を与えた点を述べた。今後は、「情報弱者」をつくらないような工夫が必要とされる。

情報とは、「人が生きることに関わるあらゆる事柄」である。また同時に「衣食住の基礎」になるものである。戦後のTVの登場は世の中の情報量を飛躍的に増大させ、その結果、世界のボーダレス化、

思考する機会の減少、多様化とは裏腹の同一化、均一化をもたらした。

今、現代社会ではTVを上回る存在としてコンピュータがある。コンピュータは、新聞のつくり方にも大きな変化をもたらした。校閲機能のコンピュータ処理化などはその典型である。

このような情報化がもたらした問題点もある。世界中がインターネットによって結ばれたことにより、犯罪やプライバシーの侵害、人間不信などをもたらす危険性をはらんでいる。

教育との関わりで、情報をどのように扱うかという点では、「創造力、個性豊かな人材」を育てていかなければならない。最後に、地理教育関係者は、「地球に生きるそれぞれが、共に生きる“共生”の心をもちあう必要」がある。それを子ども達に養ってほしいと強調した。

〔研究発表〕

生徒の学習意欲を喚起する授業づくり

～作業学習の展開と資料の有効活用について～

名寄恵陵 白浜 徳博

地理は暗記科目として位置づけられているため授業への関心興味には個人差がある。このような中でどのように生徒の学習意欲をかきたてることができるかということについて作業学習、資料の活用を中心に報告があった。質疑では、“地理ビンゴ”やレポート作成の具体的な実施について多くの質問が出された。

〔助言〕

濱本先生からは、生徒を受け身にさせない、ということが現在の課題になっている。白浜先生の実践は解決の糸口になるとの助言があった。また地理教育の課題を示された。

太田先生は、授業形態について、新しい教員が中学・高校時代にどのような授業を受けてきたのかが重要だから、少しでも授業を工夫してほしいと助言があった。また暗記科目に陥りやすい原因や学校の特長、年間計画、今後の地理教育の見通しなどについて示唆された。

数 学 部 会

〔講演要旨〕

いま、数学教育に欠け落ちているものがあると思いませんか？

九州大学大学院数理学研究科 吉川 敦
北大理学部時代および九大工学部へ移ってからの幅広い経験を通じて感じた、数学および数学教育の

社会における役割に対する所感。教育にあたっては、「何事にせよ、基本は何か、本質は何か、原則は何か」ということをまず第一に考えるようになるよう留意すること。また、工学部と理学部の対象に対する捉え方の違いについてふれ、担当する理学部出身の数学教師は数学の社会的役割に対する深い自覚が欠けているのではという疑問を投げかけた。例として統計分野の必要性を、九大のアラカルト入試における取り組みを通じて紹介する。数学ソフトの話題では、利用に際しての数学的な意味・理解力の必要性を示唆し、教育内容の将来的需要増加を示唆した。

〔研究発表〕

①数学の習熟度別授業の展開について

和歌 志郎 (礼文)

平成7年度2学期から、1クラス26名を応用・標準・基礎の3段階に分け、黒板を3分割。

②インターネットは数学教育を変えるか

奥村 稔 (旭川凌雲)

インターネットのWWWにおいて、数学の発想や考え方を公開した「マスオンライン」の提案とインターネットの概要説明。

③コンピュータ・グラフィックスを利用した教材作成

松本睦郎 (札幌平岡)

数理現象をコンピュータを利用して、視覚に訴える入試問題の教材を作成。

〔質疑応答〕

①〔質問・意見〕習熟度授業に踏み切った動機と評価法についての詳しい説明を。来年以降も是非意見発表を続けてもらいたい。 小川先生 (石狩)

〔回答〕上位生徒の欲求不満と下位生徒の無気力が動機。評価については、小テストやノート提出を通しての低学力者救済を主眼とする。

②〔質問〕グラフィックスや数式をインターネットでやり取りするのは難しいのか。また、インターネットを習得するのは困難か。鈴木先生 (岩見沢東)

〔回答〕数式などのやり取りは近々解決するものとする。市民公開講座は10時間で終了したので、先生方であれば半日程度で十分終了すると思われる。

③〔質問〕グラフィックスを印刷してプリントにするより直に動きを見せた方が良いのでは。

小川先生 (石狩)

〔回答〕教室移動等、授業にパソコンを利用するには拘束が多すぎる。

〈助言〉

インターネットについては利点と課題があり、い

ずれにしても高校の大きな教育課題である。

小笠原英俊（道研）

平成7年より5年間、総合ソフトを全道高校に配置すべく予算化を図る。来年度より道研にライブラリーを設置するが、貸出しは行わない。

菊池隆夫（道教委）

理 科 部 会

〔全体講演〕

「理科における環境教育の視点とアースシステム教育」

国立教育研究所 下野 洋 先生

I 理科における環境教育の視点

これからの環境教育では、身近な自然の科学的な認識と科学的なデータに基づく環境問題の理解が一層充実されなければならない。

1 環境教育の今日的なとらえ方

- (1) 環境問題に対する国際的な取り組みや人類と地球生態系との共存を図るなど幅広い視野で、環境教育をする必要性がある。
- (2) 地球環境の問題については、科学的データに基づき自然と人間との関わりを正しく理解し、持続可能な取り組みができるようになることが大切である。

2 学校における環境教育の基本的な考え方

学校での環境教育は、多くの教科、道徳、特別活動を通して環境教育的な視点から多面的に扱い、事象を総合的に学習できるようにすることが大切。

3 環境教育の内容のとらえ方

例えば、次のような概念が環境教育の内容として取り上げられよう。①「システム」としての自然環境の理解、②「時間・空間」の理解、③「生命」の理解、④「循環」の理解、⑤「自然界の平衡」の理解、⑥「有限性」の理解、⑦「閉鎖系」の理解、⑧「環境倫理」の視点を持つこと

4 自然環境の科学的な理解

環境問題の性質が理解できるようにするためには、児童生徒の発達段階や地域の実情に対応した教材の開発や指導の仕方に工夫が必要である。

II アースシステム教育（ESE）

ESEは、科学の基本的概念を地球を中心に展開する統合科学カリキュラムで、「変化しているアースシステム」を学習させようとするものである。ESEの目標や趣旨を理解するために、まず指導者が体験し、野外における内容がESEのどの目標と関わりがあり、生徒の実習のためにはそれらをどのように組み立てればよいかを研究する必要がある。

理科 I・II 部会

〔講演要旨〕

自然環境保全と環境教育

東北大・北大名誉教授 八木 健三 氏

自然環境保全には価値観の変革が必要であり、その為の柔軟な頭脳を育てるのが環境教育である。だが人間の精神構造にまで影響する自然環境なのに、それを保全することへの日本人の意識は低い。環境教育には、幼少年時代から体験させ、育て、次代への環境保全保護するのが絶対必要である。その環境を守る為にも、今北海道で問題になっている、放水路・幌延問題・士幌高原について、教育を試みることを望んでいる。

〔研究発表〕

① SAAP 教材による環境教育の実践

＝物化領域での日本・タイ事情比較＝

札幌藻岩 山田 大隆

SAAP教材の「家庭でのエネルギーの利用・飲料水・家庭のゴミ」を生徒に実践させ、結果をタイや東京の高校の状況と比較し考察した具体例を示した。今後は、北海道に則した応用的な研究を進めたい。

②天然素材を利用した環境教育の展開について

＝カイコのまゆ玉から真綿をつくる＝

＝キトサンによる重金属の吸着実験より＝

札幌東陵 西出 雅成

生徒とのコミュニケーションを大切に、討論や対話を通して意見を発表させ、「まゆ玉から真綿そして洗剤」へ「キトサンから重金属の吸着そして金属ゴミ問題」へと発展させ、天然素材を利用し工夫した環境教育の授業や実験を具体的に示した。地域や生活に着目し、他教科との関係や複数教員による授業の展開、実験観察などを取り入れより発展させたい。

③教科通信を用いた授業実践

＝一般教養を育むために＝

共和 水野 雅文

理科嫌いの生徒を引きつけるために、教科通信「もっと科学（サイエンス）」を発行し、一般教養としての理科知識を生徒に伝える授業実践例を具体的に示した。生涯学習の動機づけや理科離れの歯止めになればと考えている。

④地域の自然や施設等の教材化への試み

芦別 吉田 哲

全員履習の地学 I B の学習指導に、地域の自然（芦別の自然を訪ねて）や施設（滝川市こども科学館・

星の降る里百年記念館・無重力科学館・炭鉱館), 人材(学芸員・技術員)を活用した授業展開の具体例を示した。生涯学習を重視し, さらに良い形に修正したい。

⑤ SAAP教材を用いた環境に関する授業への取り組み

大麻 田辺 彰宏

SAAP教材の「何を食べていますか・家庭でのエネルギーの利用」を用いた授業の具体例を示した。多くの生徒に実践させ, 環境を考えさせる場を与えることが大切である。

⑥ 助言者 根室教育局 熊沢 英昭氏

5つの研究発表についての指導助言があった。総合理科を行っている学校の生徒には理科嫌いがいないようである。総合理科部会が他の部会の先頭に立って理科を引っ張って欲しい。

物理部会

〔講演要旨〕

放射線の(線)量とその測定

北海道大学工学部 教授 澤村 卓史氏

高校の教科書の中の測定単位について, 放射線の単位と放射能の単位のちがいを, 放射線に関する分野, 自然放射線, 線量計測と放射防護, 放射線の種類と性質, 原子核の諸量, 放射壊変, 壊変図式, 壊変の法則と放射能, 放射能(壊変速度)と壊変定数, 半減期, キュリーとベクレル, 放射線と物質の相互作用, 荷電粒子と原子の相互作用(原子核との衝突, 軌道電子との衝突, 原子核と電場の相互作用による電磁波の発生), 気体のW値, 放射損失, 相互作用の割合, 放射線の線量, 線量の種類とその単位, 放射線防護, リスクの合計と実効線量当量, フルーエンス, エネルギーフルーエンス, 吸収線量, 線量当量, 実効線量当量, 1センチメートル線量当量

・研究発表

波動についての授業実践

＝五感で理解することを目指して＝

上川 遠藤 孝一

考えを一般化するのは難しい。いろいろな現象を見る, 考える, 討論することで波動分野の授業を組み立てている。VTRによる実験の紹介。問題点1) 授業時数が足りない。波動分野だけで50時間ほど当てた。2) 問題演習の時間がとれない。3) 内容の配列など今後工夫が必要である。

物理教育に求められるもの

＝パソコン計測, インターネットについて＝

旭川凌雲 萬木 貢

物理学において数式的な取り扱いを避けて通れない。しかし, 数式を理解するのは難しい。視覚的に説明する図, モデルによる説明, イメージ化を助ける道具の利用が重要になる。はねかえり係数のパソコンにより計測。インターネットを教育現場に活用する可能性。

5分間デモ実験

コンピュータで物理教材(佐藤健), シャドーカラー(大坂厚志), 車輪で人間ジャイロ(遠藤孝一), 水発電機(阿部英一), 自作ミニモーター(加藤秀明), レーザーが描く不思議な図形(中嶋紀男), 発泡スチロール製の飛行機を浮かせよう(高桑知也), 光でドレミ(横関直幸), 放射線の測定(武田伸彦), 空っぽの空き瓶を空っぽにしてみる(今野博行), 液体窒素で放射線をみる(鶴岡森昭), コイルから飛び出す鉄棒(関川準之助), レプリカフィルムを使った光の干渉実験(佐々木淳)

・助言

理科センター 大久保政俊

授業の中に「討論」をいれることの意義, 物理現象をモデル化するための工夫, インターネットを教育に利用する方法の模索, デモ実験の交流が将来にもたらすもの

化学部会

〔講演要旨〕

「遺伝子診断「薬の効き過ぎを予測」」

北海道大学薬学部教授 鎌滝 哲也氏

去年の「地下鉄サリン事件」等について薬学関係者がそれらの物質の種類や構造, 効用を説明していたが, そもそも薬とはどのようにして用いられるのか, また最近の遺伝子工学の発展とともに現在どのような研究がなされ, 将来はどのようなのかといった点についての興味深い内容の講演であった。

薬の効用と代謝, 毒性については個人差があり, 体質その日の体調によっても変化する。特にその解毒化をすすめる酵素の仕事は重要だが, 遺伝子があることに大きく関わっている。遺伝子の欠損によって酵素が減少, 合成されないことにより, 薬が正常の人よりも効きすぎることがおこるからである。日本人が白人よりも酒に弱いというのも酵素の量によるため, いわゆるDNAの塩基配列が1つ違うだ

けでも起こりうる。

薬の場合でも古くから遺伝的な要素での違いが指摘されていたが、氏は講演の中で「チトクロームP450」の中の「CYP 2C19」と「CYP 2D6」という2つの酵素について説明された。このうち、後者の酵素の欠損でかぜ薬等に含まれる抗ヒスタミン薬が効きすぎ、かぜ薬でフラフラになったり眠気を催すことがわかった。これら2つの酵素の欠損が、遺伝子すなわちDNAの塩基配列の変異によることは種々の研究法(PCR法など)ですでに明らかになっている。

今後は臨床薬理的研究(代謝の多型性が出る薬の発見と分類)、遺伝子診断、新薬開発などの分野においてさらに遺伝的な研究がすすみ、有効かつ安全な薬の使用に役立てられることであろう。

〈質問〉

- 自分も抗ヒスタミン薬の効きすぎがあるようだ(浅井: 札平岸)。～血中濃度を調べる必要がある。
- 薬の表示(ナンバー等)の見方、有効期限、遺伝子鑑定費用について(藤原: 蘭越)。～有効期限はあまり関係がない。費用は数万程度。
- 体内に薬が結晶として残留するか(石田: 札稲北)。～ほとんどない。

〔研究発表〕

①年間を通した化学実験への取り組み

様似 渡辺 匡範

生徒の質が多様化するなかで、基礎基本の理解や定着が不足している生徒に対し、理科としての意欲や成就感をもたせるような実験を年間を通して計画し、実践している。

②身近な「モノ」を利用した化学実験の紹介

茅室 村田 一平

身近な実験の題材として「PVA(せんたくのり)」、「ペットボトル」、「チョーク」を用いた実験を演示で紹介。

③探究活動・課題研究の定着のために

=「身近な物質と化学の実験」編集の動き=

札厚別 玉利 和宏

表題の冊子編集と内容の報告。

〔助言〕

理科センター 鈴木 哲

更なる改良・研究と多くの参加を望む。

〔講演要旨〕

動物の自己犠牲は利己的行動

北海道大学地球環境科学科教授 東 正剛 氏

一般に動物は利己的に行動をする。それは特に生殖行動に出やすい。精子競争はその典型であり、トンボでは交尾のとき、雄が雌の受精のうの中の他の精子をかき出し、自分の精子を受精させる。また、ライオンや一夫多妻性のサルの中では、グループ内の雄が他の雄にとって代わられたとき、新しい雄は前の雄の子供を殺すことがある。これは種の保存という面からみれば、全く無駄なことである。しかし、新しい雄が自分の遺伝子を後世代に残すためには前の雄の子を殺すことが一番なのであろう。つまり、これらの行動においては種の利益よりも個の利益を優先していると考えられる。

しかしアリなどの社会では働きアリというものがあるが、これらは反対に自己を犠牲にして他の個体(女王)の生殖を助けている。ハミルトンは子供以外の血縁者を通して遺伝子を後世代に伝えようとする「血縁選択」という考えでこの行動を説明している。これで見ると、自分の遺伝子を後世代に残すという意味では、働きアリといえども利己的であると考えられる。

〔研究発表〕

①クラブ活動を通した理科教育実践例

=生徒による自発的理科研究方法の模索=

訓子府 金澤 昭良

部活動を通して、生徒に自然科学に対する興味関心を引き起こす取り組みをしている。

●身近にある河川の水質調査

生徒を興味を持ちやすく、結果もはっきりしたものが得られるため取り組みやすい。環境問題への意識も高めることができる。

●スギナ胞子及びつくしの研究

弾糸が胞子発芽に及ぼす影響、胞子の光合成に与える諸条件の影響などについて調べた。

今後、ヒゲカビやヒバマナなどを題材にしようと検討中である。また、クラブの研究の成果を実際の授業でも活用している。

②藻類の教材化への提案

札幌清田 佐藤 輝夫

藻類はらん藻、紅藻、褐藻、緑藻など変化に富んだ生物群で独自の生活環を持つ。しかし、最近の学校教育の中では藻類は軽んじられている。今後の地球環境を考える上でも藻類は重要な生物群であり、

教材化の工夫を考えた。適している実験として、顕微鏡観察、浸透圧実験、光合成色素の分離、海藻での光周性の研究などがある。また「磯焼け」についてのビデオ学習で環境問題に対する意識を高めるための実践もしている。

〔助言〕

理科教育センター 片岡 辰三 氏
クラブを通して科学する心を育てることは、理科好きの生徒を増やすための地道な努力として評価できる。藻類はマイナーな教材として扱われてきたが、実践しやすい教材であり、各学校でも工夫をして取り組んでほしい。また、今後いろいろな場での情報交換をしていく必要がある。

地 学 部 会

〔講演要旨〕

地球環境の理解を深める地学教育のあり方
国立教育研究所地学教育研究室長 下野 洋 氏
環境教育の根本は地学教育にある。昨今、高度情報化社会の到来が言われているが、必ずしもそれによって印象が長く残っておらず、しかも環境をフィードバックによってとらえがちになっている。そこで「地学リテラシー」の育成が必要になってくる。
リテラシーとは、市民として生活する上でひとりひとりが身につける最低限の知識。例えば災害時に命を守るために日常学習したことを実行できるか。けれども、命を守るだけでなく自分の周りにある自然環境の見方、問題解決のための素地を養うことも必要である。しかし、生徒は知識は知っていてもそれを実物に対応できないのが現状である。

そのような中で、リテラシーを考える観点としては、①自然を知覚的体験的に認識させる。②自然環境の変化を認識させる。③人間と自然との関わりを認識させる、などがある。また、リテラシーは楽しく役に立つもの、トピック的なものから入ってもよい。

地学領域は青少年のロマンが含まれている。教室内の知識の習得に留まらないで地域の自然に触れてそこから一つでも一般化できるようにしたいものである。

〔質疑応答〕

高校生になってからでは地学リテラシーの形成は難しい。小中高の連携の現状は。
下野 地学教育学会の各県の理科センター等で実践されているが、まず地域から積み上げて行きたい。また小学校の教科書などを高校教員も検討してみてはどうか。菅原 (阿寒)

〔研究発表〕

天文分野における教材の工夫

—生徒がより主体的にとりくめる実習—

標津 是永 修克

郡部校で授業がなかなか困難だった中で、いかに楽しく、生徒にあきさせない授業を創るか、以下のような実践を行った。

①太陽系のモデルをつくり、グラウンドに出て実証。
②標津専用の星座早見盤の製作。
③プラネタリウムの製作。

地域研究における探究活動 (地学分野)

—巡検と課題研究発表会—

豊富 滝沢 金光

教育困難な状況下で、昭和58年度より地域に溶け込むことを目的に理科I・現代社会合同巡検が始まった。その後、地歴科の中に必修の「地域研究」という科目が設置され、年2回の巡検や研究発表会の開催に発展している。

〔助言〕

高橋 文明 (理セ) 下野 洋 (国立教研)

・生徒の体を使わせたのがよい。生徒に成就感を得らせている。
・多様な評価が個性を伸ばす事につながっている。

保健・体育部会

〔講演要旨〕

新しい高校体育の課題

文部省体育局体育官

島根大学教育学部教授 杉山 重利 氏

文部省という堅いイメージ?とは全く異なり、語りかけるわかりやすい、ユーモアをまじえた講演で時間が大変短く感じたのは私だけではないでしょう。これからの体育は?部活動は?最近の学校問題「いじめ」の原因は?等予定時間をオーバーしての講演。

戦前の体育と戦後の体育はちがう、10年毎に変化し、又2~3年後には変化するであろうその為の検討がなされている最中で、体育はどうなるのか?このことに大きく影響を与える要素は、子供達、父母、地域が学校に、教科に何を期待しているのか?体育をどう見ているのか?が大きなポイントになることを強調、アンケート集計結果体育は最悪で今のようないろいろな授業ではダメ、選択制をとり入れ、新しい学力観のもと、生涯体育に結びつく体育授業の展開を、と自動車学校、劇場を例に選択体育の重要性を力説。「いじめ」の問題についても体育での男女共修、教

材・展開の工夫で、痛みのわかる生徒等期待出来る教材である、又部活動については好きな生徒が基本集団で天才の集団ではない、365日練習しないと全国に行けないは神話である。部活動として育むものは、楽しさが前提にあってその上での活動であることを強調され、部活動のあり方に問題提起。

〔研究発表〕

エイズ教育（性教育）の実践

知内 盛田 光則

○全町の一貫した取り組み ○学校教育活動を総合的にとらえ、教科間や特別活動の連携 ○保健では「集団の健康」を一年で学習 ○エイズに対する偏見・性感染と薬害等、エイズに対し教育は最大のワクチンの実践報告

その他の科目「生涯スポーツ」の実践を通して

本別 汐川 裕彦 氏

既存のスポーツの学習にとらわれず新しいスポーツを創造し実践することを視点に、試行錯誤を繰り返しながら生徒がニュースポーツを考案、伸々と又楽しげに体育活動している姿がVTRを通じて伝わってくる新鮮な研究発表であった。

各学年の段階的選択制の試み

札幌清田 門脇 覚

ねらい

3年＝スポーツの生活化

2年＝選択制体育の基礎基本

1年＝3年間の体育授業を見通した学習の進め方、学び方、自主的な学習の実践

雨天時は授業進度を大きく外れないように工夫
評価設定は難しい、生徒、教師が納得する評価等
大規模校での実践報告である。

午前の講演、午後の研究発表とも時間が足りず質疑応答の機会がとれなかったが参加者は熱心にメモしたり一言も聞きもらすまいとした熱気の中での保健体育部会であった。

養 護 部 会

〔講演要旨〕

高等学校教育研究会養護部会は午前中は研究発表、午後は講演が行われました。北海道根室高等学校の養護教諭谷内潮先生は、「保健室利用状況から見る保健室の生徒の傾向」で過去3年間の来室者数の変化をもとに資料を作成されました。来室者の特徴の傾向を把握して、よりよい保健室経営にむけての発表

でした。不定愁訴による来室は3年間通じて変わらず多く、処置をしてすぐに教室へ戻る事が出来る性格のものではないので来室する生徒ひとりひとりに対応できる環境づくりがもとめられて校内でいろいろなたらきかけをしたということでした。

「保健室」に求められてることは、相談活動に果たす機能が重要視されてるようです。教職員に対して保健室から資料や情報を提供して教職員とコミュニケーションをはかったり気軽に足を運んでもらえる保健室にするよう努力してるところで参加者からは、数の上での変化に加え今度は来室原因に注目する必要を指摘する意見やデータのとりかた、生徒への具体的対応について経験豊富な意見もありました。午後に予定されていた講演「養護教諭に期待するもの」雪害のため杏林大学保健学部教授出井美智子氏の到着が遅れ急きょフリートークングになりました。助言者として出席いただきました教育庁生涯学習部スポーツ保健体育課佐藤菜子指導主事から最新統計の報告や平成8年度からの歯科検診の進め方やエイズ問題ほか情報提供などがありました。30分程度でしたが出井美智子氏は到着するなり貴重なお話しをしてくれました。長く養護教諭の発展進歩の為ご活躍されていて、養護教諭の変遷や最近の一般社会から見た、または要求されてる養護教諭像について話されました。全国の保健室登校の実態調査から養護教諭に必要とされているものは、「気づき」であることを強調されてました。1000校の小、中、高で1週間に保健室を訪れた全ての児童生徒数を調べると学校規模の大小もあるけれど平均日に30、多いところでは100人を越えるという結果がでたそうです。保健室登校の存在校は、小学校約7パーセント、中学校で約24パーセント、高校で約8パーセントを示したそうです。

いじめをきっかけに養護教諭の立場も一般にひろく知られるところとなり心の問題がクローズアップされているなか養護教諭は一人でかかえこむことのないようにと警告を発してました。どうにもならなくなってから生徒を連れてこられるケースも少なくないとの専門医の意見や早い時期の「気づき」はカウンセリングの技術の研修を全て修得することよりも大切であると話されました。心を計るものさしがないだけに養護教諭の「気づき」が大切だということが短い時間内でしたが説得力がありました。

芸術部会

〔講演要旨〕

「これからの芸術教育について」

東京芸術大学美術学部

デザイン科教授 伊藤 隆道 氏

自己紹介（作家としての足跡と時代の背景）

私の職業は、と問われると多岐に渡っているので明快に答えられない。その時々で既成概念にとらわれないで仕事をしていて、デザイナー、彫刻家、造形家などと言われている。

時代の変化に従って自分のジャンルが変わってきたが、時代に合わせたのではなくて、いわば自分の表現に時代が後から付いて来ていた気さえもする。高度成長の時代にちょうど結び付いていたのではないかと考えている。

学生時代からプロ的な制作を始め、資生堂のショーウィンドーのディスプレイを手伝いで手懸けたのをきっかけとして、10年間毎月1回約100点の作品を制作した。又、建築ブームに乗ってホテルの照明デザインなどもした。その頃、日本の現代芸術の幕明けの時代だったので、野外彫刻展に出品し始め、それまでの商業芸術家としての立ち場から純粋芸術家として評価されるようになっていった。この頃の建築や純粋芸術や環境彫刻に自分の作品が合っていたようで、以後一貫した制作活動をしている。

スライド説明 — 作品の紹介 —

自分の作品が「動き」をテーマとして始めたのは、ショーウィンドーの口紅が上下に動く作品がはじまりで—それらの作品がデザインの世界だけでなく、純粋芸術の世界にも欲しい表現だと評価され—その後の野外での動く彫刻に発展していった。動く作品も純粋芸術の一翼を担っているという評価もされていった時代であった。

一人の作家として純粋芸術やデザインなど一つのジャンルに固執せずに柔軟に仕事をし、自分の表現活動を続けている。

最近、表現のジャンルが固定化していて、表現技術、文化、芸術の世界の中で保守的な枠組が強くなっている気がして、非常に危惧しているところもある。

だからこそ、どこかで保守的な部分を切り崩す挑戦的、創立的活動が必要だと考えている。

教育の問題について

創造性や芸術性が頭打ちの時代と言われ、オリジナリティーの欠如が問題視されているが、教育は面白く重要な問題だと感じていて、生甲斐を感じている。現在では苦手の教育も自分のテーマの一つにな

っていて、芸術教育が重要な時代ではないかと思っている。

私は、生まれ育った風土の違いが創造性の違いになるように思う。北海道と言う風土や雰囲気は自分自身をつくり、実際にその原体験がしだいに造形化してゆき、いまだに制作活動の中で続いている。領域にこだわらない新しい試みや創作活動などは北海道の背景に合致しているのではないかと思う。

自分のことを考えると背景に北海道と言う何かがあると思えるし、ものを創る背景—地域性や空間性など—には適した環境ではないかと思う。

若い人達がこれから育つ土壌が十分にあると思うので、ここに集まっている皆さんに期待をし、お願いしたいと思う。

音楽部会

苫小牧西高等学校の三栗伸久先生より、①現在実践している授業②日頃からの疑問、の2点を柱として発表があった。要旨は次の通りである。

1. 学校の概要

苫小牧西高の生徒の多くは「教師の指導には素直に応じたり行動することが出来るが、反面、自ら進んで考え、判断し行動することに欠けている」（資料原文のまま）という全教職員の一致した認識があり、自主性の育成が指導上のポイントとなっている。

2. 教育課程

芸術Ⅰ・Ⅱは選択必修。Ⅲは、改訂された学習指導要領の主旨を生かした選択科目群の中に配置。

3. 授業について

生徒が活動する授業を目指し、「想像的な授業を求めて、指導と評価がどうあるべきかが問われている」との考えから、次の6点を授業指導、評価の観点としている。

- (1) ゆとりのある授業を常に心がける。
- (2) 到達目標を生徒の活動状態と考える（形成的評価）。
- (3) 生徒が考え（相談し）たどり着いた結論を肯定的に捉える。
- (4) 生徒で十分に問題解決できる材料を精選する。
- (5) 生徒の意欲を喚起できる教材の精選。
- (6) 生徒間で協力、相互評価、研鑽できる体制を作る。（以上6点、資料原文のまま）

4. 授業実践例

「バッハのカノン教材としたリコーダー・アンサンブル」

生徒自身に気付かせること（主体的な問題解決の姿勢）、生徒の創意工夫の評価を心がけている。

5. 日頃からの疑問

以下のことについて、諸先生方の率直な意見を伺いたい。

(1) 学習指導要領が求めている全てを授業に反映させるには、時間が足りないのではないか。

(2) 必ず教科書を使用しなければならないのか。

(3) 履修のみで1年間の学習を認定すると、どのような問題が生じるか。

意見交換の場では「生徒の主体性に基づいた授業」が主たる焦点となった。生徒に任せておいて成り立つ部分と成り立たない部分があり現実には教師主導にならざるを得ない、評定には生徒の努力より完成度の高さに主眼を置いてしまうことが多い、生徒が自分で目標を見つけて学習するという発想を大切にしたい、自主的に学ばせるためには教師の十分な準備が必要、等の発言があった。

助言者の枝幸高等学校、蓬田先生からはグループ学習の際の編成方法、評価の観点の定め方の重要性について指摘があり、履修のみで学習を認定する場合の生徒指導上の問題点が示された。また授業に臨むにあたって、生徒理解・生徒尊重・雰囲気作りの大切さと同時に、目標・計画・実践・反省・評価の組み立ての工夫を説かれた。一方、「心の時代」に音楽教育の接点を見いだす必要性、授業の細分化・総合化という二極化への見通し、授業における地域性の反映、について提言があった。(文責・有朋高等学校 高橋利夫)

書道部会

書道部会では、函館北高等学校の鈴木孝徳先生から、「表現ということ——プリント「探究心」——」という研究発表が行われました。

「探究心」というプリントは、次の2つの目的で使われています。

1. 生徒が臨書する際、自分はその法帖から、どのような印象(イメージ)を持ったのか。その印象を表現するには、どの様に筆を動かすのか(方法論)、という、自己の目標を自分で設定し、文字で書き留めることによって具体化させるため。

2. 出来上がった作品のみで評価する技術至上主義を排し、せっかくいい目を持っていながら、表現しきれない不器用な生徒を援助するため。

この「探究心」というプリントは、最初の印象だけにとらわれているのではなく、授業が進むにつれ、鈴木先生からのアドバイスや、自分で新たに発見した印象を続々と書き足したり、書き直したりしながら、目標をより明確化してゆくものです。

作品提出後には、合評会を行っています。合評会を行うメリットは、次の3つです。

1. 人前で発表するので、目標をしっかりと持つことができる。

2. 人の作品を批評することで、自分の作品を作る際、客観的に見ることができる。

3. 仲間にも、先生にも褒められて嬉しい。

今後は、方法論ばかりにとらわれなくて、常に目標を意識できるもの。作品を提出するまでの、各授業中に、生徒の印象がどのように変化したのかが見やすいものに改善してゆきたいということが話されました。

質疑応答では、次の様な意見が出されました。

◎1年生の初期の段階で、法帖に対する印象を書かせるのは難しいのでは◎取り上げる法帖が方筆のものに片寄っているのでは◎個別の目標も大切だが、共通の目標があればどうか◎教師の法帖に対する印象とかけ離れた目標の生徒には、どう対応すべきか◎印象(イメージ)は、創作の際に用いられる言葉ではないか等々。

これらの意見・質問に対する鈴木先生の応答により、生徒一人一人の課題目標を大切に、目標が達成できるように援助されている、鈴木先生の寛容的な姿勢による指導方法のすばらしさを確認しました。

最後に、畠山先生、本間先生から、従前の、一斉授業と違い、生徒を個々を活かし、自分の成長過程を記録し、残せるすばらしい実践である。自ら課題を見つけ、自ら問題を解決してゆくこの実践は、新学力観に沿ったものである、という助言をいただきました。

美術部会

平成6年度がコンピューター導入の完成年度ということで全道にも普及した。美術の授業においてもその導入が叫ばれながら、実際には中々取り入れることが難しいとされる分野である。今回は「コンピューターを使用した美術授業の実践例と今後の発展性について」というテーマで、札幌西高の鶴沼先生の研究発表が行われた。

発表の内容は、その実践例、コンピューター導入の現状、有用性、問題点、今後の発展性ということで、具体的な発表というだけでなく、コンピューター導入への提案とも言えるものであった。

授業にコンピューターグラフィックスの教材を取り入れて5年(前任校舎)、情報処理教室の使用上で苦労も紹介された。校内事情により異なるが、それは導入の壁の一つである。そして、現状は、人的

な条件もあるが、設備や予算に関する物が導入の最大の壁となっている。授業実践においては、導入の困難さに反比例するかのように生徒は熱心な取り組みを示し、また、大きな興味、関心を持つ。コンピュータの使い方を習得し、ソフトウェアの機能を理解するだけでなく、ハードウェア、ソフトウェアの限界に達するまでの好奇心を持って取り組んでいるということであった。また、授業で制作された作品が紹介され、実際にディスプレイ上で作品の試作も見ることができ、参加者の興味、関心が高まるとともに、コンピュータグラフィックスが身近に感じられた。

協議においては、デザイン分野での使用については、かなり効果的な指導や学習が可能だという意見が多かった。発表のまとめにもあったが、コンピュータの使用については、手で表現することの大切さを忘れ、感性の欠落につながるのではという危惧の声や機械に対する抵抗感はある。しかし、助言者の開沼先生（札幌東陵）の言葉にあるように、美術における多様な表現を工夫する上で有効であるとともに、現在、様々な分野でコンピュータが導入されており、美術においても避けて通れないと思われる。つまり、コンピュータグラフィックスは、あくまでも美術における表現手段の一つと考える。そして、これだけコンピュータが普及し、今後更にその可能性と発展性が注目されている現在、美術の授業におけるコンピュータグラフィックスは、「機器に慣れ、コンピュータの扱いやファイルの概念を自然に習得するアプローチとして、比較的抵抗なく入っていける分野だと考える」（発表者）ことができる。

今回の研究発表及び研究協議においては、ハードウェアとしてのコンピュータ画面上でグラフィックソフトを実際に起動させ、体験することもでき、「使える」という感触を持った参加者も多くいたように見受け、大変有意義なものとなった。

英語部会

〔講演要旨〕

“わが国の外国語教育はなにをどのように改革すべきか”

— 諸外国の外国語教育と比較して —

慶應義塾大学教授 小池 生夫 氏

第二次大戦後のヨーロッパ、アメリカ、東南アジア、中国、韓国での外国語教育の歴史と現状を紹介し、日本が遅れている点を指摘した。その後我国の発展のため、英語教育について次のような提言があ

った。

①入学試験にリスニングテストを導入する。高校入試ではほとんどの県で実施されており、大学入試でも広がる傾向にある。設備の面で難しい点もあるが、その効果は大きい。

②小学校の授業に外国語を入れる。すでに実施、あるいは予定になっている国も多く、世界的に流れとなっている。

③英語教員はプロ意識を再確認し、コミュニケーション能力、国際交渉能力を養成する方向に進まなければならない。そのため伝統的教授法である grammar translation method を捨て、効率的教授法である communicative approach にする必要がある。

〔研究発表〕

国際性を育てる英語教育はどうあるべきか
— 総合的言語活動の視点から —

名寄 知志 芳彦

生徒の中に国際性を育てるには

①外国文化を知ると同時に、日本文化や日本人の性質に目を向けさせる。

② Culture dissimulators（異文化での場面状況を認定し、行き違いの理由を英文を通じ考えさせ文化的背景の補足説明を教師側で行う。）

③リーディング・ライティングの重要性の増加。海外通販の普及、インターネットの発展により、英語の連読・正確に英文を書く力が要求される。全ての領域を網羅する英語教育が必要となる。

AET/ALT に関しての情報が利用できるよう、配置先・プロフィール等の情報の整理・入手方法の工夫と改善も必要である。

〔研究発表〕

生徒中心の言語活動をいかに多く

作り上げていくか

Oral Communication の JTE 2 人制の
Team Teaching の授業をとおして

釧路工業 菅原 浩

年にわずか数回しかない ALT の訪問の問題点解消のため、ALT、JTE の役割を再考し、JTE 2 人制の TT を日常的に実施した。その結果、①生徒を授業に集中、②細かな指導、③手近に TT を実施、④互いの授業観察により、教師側の新しい考え方、技術を取り入れるきっかけとなった。

Classroom English の使用、自然な雰囲気を作り出す工夫も必要である。①小道具の利用、② Natural Setting の工夫、③ Plus-one-stage の工夫、④ Listening の指導 (Top-down 的方法で、イラスト

等を活用し、生徒の「聞く態度」を積極的なものへと変える。)⑤ Communication-Strategyの育成などが上げられる。

家庭部会

〔講演要旨〕

「これからの家庭科教育」

東洋大学社会学部教授 一番ヶ瀬 康子

1 現代の家庭を巡る状況と研究・学問の傾向

(1)家族の変化…激動の時代に暮らしが変化している。「家族」がどう変わるかが21世紀の社会全体の変化につながる。

(2)国連国際家族年行動計画要点

a 社会の基礎的単位は家族。b特に子どもの人権の確立。c 家族の多様性の認識。d 家族形成のための福祉と社会政策。

2 日本の家族を取り巻く問題

(1)子どもが人間らしさを育む機会を失っている。

(2)老人の人権抑圧(福祉が充実していない)。

3 家庭科教育の課題

人が生き生きと知恵豊かに生活することが教育の原点。高齢者問題の研究の充実が必要。身辺的自立、経済的自立、精神的自立を図るのが家庭科教育ですべきこと。

4 まとめ

家庭科は、発想法を大切に、生活は自己実現を含め、創っていくものだと子らに伝えるべきである。

〔研究協議〕

家庭部会主題

「時代の変化に対応する家庭科教育の創造」

発表者および研究テーマ

齋藤 陸子 函館水産高等学校教諭

「家庭一般」における食生活領域の指導

=生活の充実向上を目指して=

坂田 一重 恵山高等学校教諭

「家庭一般」男女必修のねらいを生かす指導の在り方と指導の現状

齋藤教諭から、男子校で水産製造学科を置く学校の特色や生徒の興味関心を生かした食生活領域の指導について、食生活の充実向上を図る姿勢を身につける事が生き方を学ぶことへつながると伝えたいと思い、学習のねらいと内容についての発表がなされた。坂田教諭からは、男女必修「家庭科」の本質的なねらいは何か、実際の指導の場での指導内容・指導方法について、「家庭・家庭生活」を中心として取り上げた発表がなされた。

質疑の後、「男女が協力して家庭を築く視点でどん

な指導をしたらよいか」を協議の柱として進行。授業で生徒がすぐ変わるわけではないが、考える機会としての題材の選択、同時に話題提供に終わらず生徒が主体的に学ぶために、調べ考え発表する重要性、討議の組織の仕方、性別役割分業と家庭内役割分担の違いを認識させる必要性等が話し合われた。

〔助言〕

北海道教育研究所 畠中 康子
家庭科教育研究室長

中学での履修状況と生徒の実態を踏まえた指導が大切である。生徒が実践的体験的に思考し判断し表現できる、心が動く授業を創ろう。

生徒が自ら生き方を見つける手助けをするのが家庭科であり、それが自分の生活や地域の生活の向上へとつながって行く。

農業部会

〔講演要旨〕

「つくる漁業をめざして」

「気をつけたい海の動物」

福井県栽培漁業センター所長 安田 徹氏

講演内容は、水産資源の特性と日本海水産業の歴史からはじまり、福井県での中国・韓国との関係や産業振興・有用資源維持の取り組み、北海道とソ連との協力体制への示唆。小浜高校、福井県立大学、一般市民との協力及び開かれた教育体制作りと多くの国々との国際交流、さらに各試験研究機関の現状(資源の管理や栽培漁業)。最後にクラゲの調査研究とクラゲによる人体への影響等同じ第一次産業としてつくる・育てることの重要性について、スライド・オーバヘッド・ビデオを駆使され、わかりやすく、肩のこらないユーモラスな講演をいただきました。

〔研究発表〕

「地域に根ざした特色ある学科の展開」

剣淵 志賀 聡

21世紀にも生き残れる学校づくりの一方法として以下の事が大切であると提言。①教育課程の弾力的運用②実習施設の整備③人的要員確保④ホームヘルパーの認定・介護福祉士の受験⑤委託実習に対する整備充実⑥インターネットの導入⑦無農薬低農薬栽培の研究⑧農業後継者対策⑨新規就農者に対する学校開放⑩生徒募集対策。

幌加内 佐藤 康則

基礎・基本の見直しと指導方法の改善を通して教師が抱え込む授業から、生徒が学ぶ指導へと学習指導の在り方の転換を図る事が大切であると提言。①

自ら学ぶ意欲を高める教育の工夫（主題活動）②個に応じた指導の充実（習熟度別学習・コース制・2分割3分割授業）③国際理解教育の推進④地域と連携した教育活動の展開（農業体験学習）。

〈質疑応答・研究討議〉

①二学期制導入に伴う履修・習得の問題は何か。

教務内規の検討・海外実習における単位認定問題、二学期制により講師導入が難しい。

②委託実習の評価について

教員の巡回、委託先の評価をし、総合実習の中で評価している。

③札幌からの生徒を入れる時の中学校との対応について、地元生徒と札幌生徒の差異は。

生徒の受け入れについては、寮の中でコミュニケーションを深めている。町内外生徒については、低学年では少々の違和感もあるが、学年進行により和が広がっている。

〈助言〉

真狩高等学校長 前田 暁男

農業高校は、後継者育成、技術者養成に加えて幅広く捉えて、他産業に従事しても農業を理解する人材を育成すべきである。農業教育は作物、草花を育てることにより、人を育てる教育力を持つ。農業教育は人づくりに役立つ教育システムである。また、プロジェクト学習法を導入することにより、課題解決的学習法を身につけることも農業高校の素晴らしいところである。

北海道教育庁生産学習部学校教育課

産業教育指導班主査 安井 孝介

二校が発表された福祉・地域性を取り入れた取り組み、個に応じた授業の展開・わかる苦痛の伴わない授業の展開は、他の学校にも参考になるであろう。今後とも地域の実態に即応した、地域と結びついた学校として努力していただきたい。来年度は課題研究の完成年度になるが、自己教育力を伸ばす学習をしてほしい。また、普通科・職業科の中で、総合学科について考えてほしい。

工業部会

〔講演要旨〕

転換期の日本経済 ―課題と展望―

株式会社たくぎん総合研究所

代表取締役社長 野島 和夫 氏

昨日の全国紙の一部の新聞によると、通産省と文部省が協同で、「ヤングアインシュタイン&エジソン計画」なる事業を行うと発表した。その主旨は、今までの画一的な人材の養成は終わり、これからは、ま

ねでなく、創造的に物を作り出す研究者・技術者の養成である、ということであった。

今は数十年に一度のものすごく大きい変革期の過程に日本だけでなく世界中がまっただ中にある。レジュメに従って具体的なことをお話しする。

1. 地球規模の構造変化
2. 日本社会の構造変化
3. 日本経済の諸問題
4. 北海道経済の諸問題

5. 企業の動き

我々は経営資源を人・物・金・情報といているが、最後に残ってくるのは技術と人材である。特に「人」の問題が今後の日本社会の帰趨を制すると言われている。従って、教育に携わっている先生方への期待が特に大きいのである。

〔研究発表〕

本校の資格取得の取り組み方向性について

～資格試験 建設業経理事務士の概要～

函館工業 向井地康弘

本校では2年前から、女子生徒の進路の選択幅を広げる手段のひとつとして「建設業経理事務士」の資格試験を新たに取り入れた。建設系の生徒は卒業後に「建設経営」の仕事に携わる者が多く女子生徒にとっても、就職に有利であるということから、生徒の態度は真剣で積極的に取り組んでいる。

本校における NC 実習の取り組み

芦別総合技術 柿原 幸一

細越 大安

本校の電子機械科で取り組んでいる NC 実習の中から、次の2つの実践例について報告する。

1. 体験入学 NC 実習課題について

理解しやすく、NCの基本に触れることができる題材に工夫した。材料は、金属材料に代えてNCワックスを使用している。

2. 自動プログラミングによる DT センタ実習課題について

3年次の後期において加工図面をCADで作成してNCプログラミングに変換、加工する一連の簡単なCAD/CAMの実習を実施している。

「高校教育の改革」―魅力ある工業高校の創造

札幌琴似工業 八尾 寿輔

小資源国のわが国において、産業の繁栄を支えてきた「ものづくり」を担う技術者育成のために工業高校定時制教育の果たす役割は決して軽んじられるものではない。しかしながら、現状は社会からあま

り高い評価を受けておらず、また生徒の意識も「働きながら学び自己実現を目指す」定時制本来の姿を見失っている。職業高校を「専門高校」へ、そして「スペシャリストへの道」が文部省から提示された今、学校ではこれらの答申をどのように実現させるのか、教師の意識と力量が問われている。

商業部会

全体部会

〔講演要旨〕

21世紀にむけての新しい商業教育のあり方

一橋大学商学部教授 片岡 寛 氏

商業高校を含めて職業高校全体は専門高校となる方向にある。産業教育の第一の目標は社会における諸側面にいかに適格に対応し、産業を支える人材を育てるかが大切である。どんなに周りが変化しても、その時代の産業社会の要請に合致した教育が可能かを絶えず見直す必要がある。産業が変わり、生徒の生活の仕方がどう変わったかを教える側が頭に入れて教育に望めるかである。私達の生活と産業がどんな関係であり、どの様な方向へいくのかを踏まえて、変えてはいけない根本と変えていく必要のあるものの教え方を考えて欲しい。21世紀にむけての商業教育が調和のとれたものであるかが問われている。

〈工業化社会からソフト化社会へ〉

昭和20年以降、傾斜生産方式により産業は進んだ。高度成長期の市場では洗濯機などの新商品が登場し、その商品は生活のパフォーマンスを高める機能を持っていた。少品種大量生産時代であり大量消費へとつながり、欲しい物が出てくると買う側は絶対に欲しいと思うようになり「モノ」型市場として私たちに入り込んできた。ポスト石油危機の市場では、ただ欲しい物であったのが幅が狭い洗濯機などの商品欲求へと拡大され、多品種大量生産時代、多様化へと変化してきた。また、ブランド品も登場し、物が生活を高める時代が終わり、消費者の生き方を実現する商品・サービスが問われる時代となり、どういうことが実現できるかに変わり「コト」型市場へと移った。その後、サービス経済化、情報化、国際化、技術革新の進展があり産業が大きく変化し、21世紀を見据えた考え方が必要となってきた。

〈産業の融業化・業際化と第3次産業の進展〉

産業は融業化し、業と業の隙間をうめている。例えばイチゴ園を作り、イチゴ狩りを行っていることは1次と3次産業の融合となっている。縦の分業として生産と販売が分離すると流通が発生する。横の分業は財で分けられていたが、売り方に変わり際を

うめている。また、ファミリーレストランは食事をする場所であるが商品販売も行い、「際」がよくわからない融業化となっている。融業化には技術融業型、市場融業型がある。そして、最近注目できる産業としては、家事外部化型、企業内業務外部化型、個別対応型、自己実現対応型のサービス産業がある。

〈消費社会の変容〉

消費社会の変容は物が欲しいことから自分がやりたいことへの「モノ」社会から「コト」社会へ変化している。自己活動として、本当はいやだが働かなければ生きて行けない自己労働型から、自己労働を削減し、充実活動考えた充実志向の自己充実型へと変化してきており、それに対応するビジネスが必要になってきている。

〈21世紀の産業社会にむけて〉

新しい社会のキーワードとして、それぞれが、バラバラでそれに対応できるビジネスが必要になる個別対応、消費者は自分が主役となる自己参加(実行)性など消費者が個別対応を求め消費者が自分で何かができる市場が成り立ち、それに対応するサービス産業としてソフト化社会がでてきた。このソフト化社会を進めるにあたっては消費者のわがままは聞き入れながら、全体の調和がとれて強い者、弱い者が調和している社会、ホロニック社会つまり調和価値である。

〈21世紀の商業教育にむけて〉

産業社会・消費社会の変化をきちんととらえ、商品・サービスの質の変化を整える基本的な産業経済の仕組みを教育の中で指導する。そして、そのビジネスに携わる者のための技能を考えたり、資格でやる気、自信をもたせる事が必要となり、変化した時にどう対応するかの人間を育てる。スペシャリストを単につくるのではなく変化に対応するスペシャリスト・ジェネラリストを作りたい。現場で対応できる能力をもつことが本当のスペシャリストである。商業教育を高校・大学をとおして行う事が必要である。

第1分科会 一教育課程一

〔研究発表〕

商業教育の活性化を図る教育課程の編成と実施について

士別商業 竹内 和弘

本校の教育課程における①就職対応に加えて、進学にも対応する ②職業人としての意識を身につけさせる ③専門性の深化と高い資格の取得の3つのポイントとして、現在、本校が実践・推進している

内容を発表する。

この数年の間に、生徒の進路希望が以前よりも変化し、商業科では約半数、情報処理科では8割が進学希望となっている。このため、進学を考慮した教育課程を編成する必要があった。就職・進学に対応するため、2年次から普通科目と商業科目との選択科目群を設け、受験は推薦入学を基盤とし、一般入試については文系への進学を考慮する。また、就職については、経理と流通販売系に就職することを考慮した教育課程となっている。

資格取得については、各科目における検定の1級の取得を目指し、情報処理科では通産省2種の取得まで目指す。特に商業科及び情報処理科とも英文ワープロ検定資格の取得が特色である。資格取得に関して、生徒の取得意欲を逆に喚起するため、補習なしで全員合格をめざしている。

生徒の校内講習会については、朝・昼・長期休業を利用して行っている。内容は、実力養成・看護医療系・公務員を柱とし、特に自学自習を基本として、進学者に限らず、やる気のある者を対象に実力養成セミナーを実施している。

最後に、生徒にはきめ細かい指導が大切で、生徒が意欲的に学習に取り組むようになってきた。我々も、学校に行くのが楽しいという状況である。

……………〔質疑応答〕……………

……………〔各学校の実情交換〕……………

〔助言〕 妹背牛商業教頭 工藤 昭男

学校の条件や地域の実態及び生徒・父母の希望等に応じた教育課程の編成を行わなければならない。進学については、進学希望者が多くなっているのにも関わらず、これに対応した教育課程になっていないのではないか。また、進学した後の生徒の学習能力の向上についても考慮が必要である。教育課程編成にあたっては、各科目が3ヶ年を通した総体的なものでなければならないのと同時に、その指導内容も地域の実態を考慮したものでなければならない。

苫小牧総合経済校長 鈴木 敏彦

今後の商業高校の課題は、生徒に目的意識を持たせる特色ある教育課程の編成、進路に関する充実した指導、専門性の一層の深化である。これらのことを踏まえ、今後商業高校は適応していくことが必要である。職業高校であるからには、学習指導要領にある専門科目の単位数を減じることは望ましくない。評価の問題では、観点別評価が大切であり、新たな学習指導案の工夫も必要である。進学対応については、普通科目の代替ではなく、専門科目の指導の充実を図った上での進学対応が必要である。教員の研修体制については、我々がまず、基礎・基本をしつ

かり身につけ、その上に立って、専門性を深めることが大切である。

第2分科会 -OA 機器関連科目-

〔研究発表〕

本校における

「情報機器活用に関する課題と今後の展望」

帯広南商業 加藤 啓

本校は、1974年に初めてコンピュータが導入され、教育内容はもとより、その施設・設備は他に類を見ないほど恵まれている。1982年の校舎改築に伴う、入選・成績処理の電算化の検討・導入の際に初めてコンピュータに関する委員会が設置され、その後3年ローテーションでリース更新が行われる際、必要に応じて委員会の改称・解散がなされた。しかし、毎年最新機種のコピーが導入されると同時にリース更新対象機種も増加し(現在12機種)、また、授業の中で使用する場合は、新旧の機種が混在することから旧機種に合わせた実習内容としなければならぬなど授業実施、機器の管理の面で様々な問題が出てきた。また、カリキュラムの変化や普通教科でもコンピュータを教具の一つとして利用するようになる一方で、成績処理等の校務処理への情報機器の利用が進み、「情報処理機器=商業教育機器」ではなく、「情報処理機器=教育機器・校務機器」にその目的が変化してきている。

これらのことから、1994年12月にコンピュータ利用に関する問題を継続して審議する常設委員会の設置を求める声に応え、「コンピュータ活用推進委員会」は発足した。委員には商業科教諭の他に普通科の教諭も参加している。昨年度は13回の討議を行い、今年度も、月に1回の割合で会議が持たれた。委員会の設立により、予算面や教室・機器の管理などの窓口が一本化されるとともに業者との話し合いもより具体的になるなど成果をあげている。また、委員会設置後、委員会任せにならないよう、具体的資料等を配布し、全職員が活動の実態がわかるよう工夫している。

コンピュータ利用に関する諸問題についての取り組みは大変な労力である。しかし、この委員会の持つ役割は大きい。今後も他校の例を学びながら本校の情報教育が益々発展していくよう努力したい。

〔助言〕

情報処理教育センター 津田 雅彰

ワープロ・パソコンの機種選定は難しい。学校によって導入されている機種は様々であろうが、現在ある機種で最大限工夫をして授業をしてほしい。ま

た、機種を選定は将来を見据えて行ってほしい。センター事業の1つとして来年度、教育用ソフトウェアライブラリーがセンターに開設されるので利用して欲しい。

瀬柳商業校長 小林 正彦

コンピュータは活用範囲が広く大変であるが、研究会などの研究・発表で分野別・機種別・言語別など内容に応じて分担をすると、個人の負担が軽くなり、校内の指導層も厚くなるのではないか。ソフトの整備は必要に応じた順位付けをし、自作・市販・無料ソフトの活用やセンターとの情報交換をしていかなければならない。ハードの進歩は急速で、学校間に格差があるが生涯学習の観点から基礎基本を大切にしたい指導をして欲しい。

第3分科会 進路指導

〔研究発表〕

札幌東商業 佐藤 雄一

玉突現象で事務系の求人が減少。350通ほど企業に挨拶状を送付し訪問実施。校内で指導強化。

教育課程は少ない進学希望者にも配慮。数年40%が推薦で本校に入学。学力の低下が顕著。

YG検査、公務員模試、適性検査、父母進路懇談会実施。面接指導は進路指導部と担任で。面接では誠実に人間性を知ってもらおう。笑顔を見せられること。買い手市場だが生徒には危機感がない。

欠席がなく、部活動をやりゆき、家が会社に近い生徒。気だてがいい子を企業は求めている。

校内選考は定期考査の成績を基礎に評定で。体験発表を3学期に実施。内定者が2年の各学級で。内定率57.3%で10%減。求人204社内事務6割、他4割。資格の条件明示は各10数社。

マナー・しつけ教育として、明るく挨拶できる生徒を全校あげて教育。人間性を育てるべく努力。

司会 1～3年までの進路の意識づけについて。

札幌東商 1年からLHRで意識づけ。人間教育・しつけ教育・資格取得に力を入れている。

江別 全員でやっている模試等は。

札幌東商 クレベリン。YG。市販の就職模試。

千歳 未就職者への指導は、求人は待つだけか。

札幌東商 3学期に進路から。クラスで再度面接指導等。自己開拓も増えた。対外的にはまだ。

千歳 評定「1」のある生徒の推薦は。

札幌東商 赤点があれば校内選考しないが、仮評定(見込点)で受験させているようだ。

小樽商 ①進路からHRに提示されている資料。

②面接指導の全員面接はどのように。

③進学者に対する進学指導はあるか。

札幌東商 ①進路ノート、進路のしおり。

②校内選考に通った後。進路と担任で。

③英語の先生が希望者数人と放課後。

千歳北 ①公務員・看護学校希望者の指導は。

②コンピュータのオンライン化は。

札幌東商 ①模試を数回。看護は数学の先生が。

②独自に入試時データを加工処理のみ。

〔助言〕

福島商業教頭 横山 正範

高卒就職者の約半数が3年以内に離職。原因は満足度の低さ、一人一社主義によるミスマッチ等。就職・進学というより就社・進大学の指導だったのでは。大量採用から、必要な個性を必要なだけ採用する時代、本人の能力や個性を伸ばす指導を。

①HR活動に体験的な活動を入れる。「在り方生き方」はHRが中心。3分の2を進路指導に。②進路相談は個別指導徹底のため定期的に学校全体で。家庭との関係を。③言葉で職業感は理解できない。体験学習による啓発的経験を。計画的に継続的に組織的に全ての学校活動の中で。

〔助言〕

旭川北都商業高校校長 中森 善晴

学校では人物・人柄、部活動、出欠などが重視されると見るが、企業では積極的、情熱、人柄等を重視。進路指導は全教員で。地域・教師・家庭の三者が一体で。全道で約9000人が未定。生徒のため努力を。詳細は調査研究部の資料を参照。

水産部会

〔講演要旨〕

「サケからのメッセージ」

財団法人サケのふるさと館々長

木村 義一 氏

魚の音楽についてから講演が始まり、サケの発生が6,000万年であること、そして、現在まで4回の氷河期を経た現在もサケは成長過程にある魚種あるにもかかわらず、サケの生態については、分からないことが意外に多い。

一例として、サケとマスの区別について、一般人から質問を受けたときの分類上の難しさについて、述べられた。

又、資源保護の観点からサケ資源の激減の原因として開拓・開発に伴う森林の伐採、天然産卵のため

の産卵床減少をとりあげ、自然・環境保護の重要性を説明された。

さらに、おいしいサケとまずいサケについて、科学的な根拠に基づいて、ユニークな説明でとても分かりやすく解説された。

その後、質疑応答が行われた。

〔研修報告〕

次の4名による研修報告があった。

①全国高等学校水産教育研究会

小樽水産 平山 聡

②産業教育指導者養成講座

厚岸水産 亀山 喜明

③高等学校産業教育担当教員長期実技研修

小樽水産 島田 政幸

④専攻科担当教員研修講座

小樽水産 須貝 暢裕

〔研究発表・研究協議〕

次の2名による研究発表があった。

①小型船舶操縦士の養成施設の取り組みと課題について

函館水産 藤本 尚志

②新しい時代における水産教育の今日的課題とその対応はどうあるべきか

小樽水産 高橋 篤

以上2件の研究発表があり、その後研究協議が行われた。

〔講評〕

小型船舶操縦士の養成施設については運輸省の基準に基づく条件整備が必要である。問題点として、小型船の建造、要員の確保などを解決しなければならない。

水産教育の今日的課題として、入り口、出口の問題もあるが、水産ベースとして、その中で多様化を図る必要がある。

北海道高等学校教育研究会会則

第1章 総 則

第1条 (名称) 本会は北海道高等学校教育研究会という。

第2条 (事務局) 本会の事務局は会長の所属校に置く。

第2章 目的および事業

第3条 (目的) 本会は高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的とする。

第4条 (事業) 本会は前条の目的を達成するための次の事業を行う。

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1 研究会の開催 | 3 機関誌の発行 |
| 2 講習会、講演会の開催 | 4 その他本会の目的達成に必要と認められる事業 |

第3章 組織および役員

第5条 (会員) 本会の会員は北海道高等学校職員、教育委員会職員および高等学校教育に関心を有するものをもって構成し、一人一部会とする。

第6条 (教科部会) 第4条の事業を遂行するために教科部会を置く。この部会の運営は別に定める。

第7条 (地区支部) 地区支部は北海道高等学校長協会の支部単位とする。この部会の運営は別に定める。

第8条 (役員) 本会に次の役員を置く。

- | | | | |
|-------|----|---------|-----|
| 1 会 長 | 1人 | 4 地区支部長 | 若干人 |
| 2 副会長 | 3人 | 5 教科部会長 | 若干人 |
| 3 監 事 | 3人 | 6 顧 問 | |

第9条 (役員を選任) 会長、副会長および監事は教科部会長および地区支部長により選任し、顧問は推薦することができる。

1 教科部会長は各教科の部会から1人を選任する。

2 地区支部長は各地区ごとに1人を選任する。

第10条 (会長、副会長の職務権限) 会長は本会を代表し、会務を統括し、会の責任を負う。副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときは、その職務を代行する。

第11条 (教科部会長の職務権限) 教科部会長は各部会を代表する。

第12条 (地区支部長の職務権限) 地区支部長は各地区を代表する。

第13条 (監事の職務権限) 監事は本会の業務、会計を監査する。

第14条 (役員任期) 役員任期は2年とする。ただし重任することができる。

第15条 (役員会) 役員会は毎年1回定期に行ない会長が召集する。ただし必要に応じ臨機に開催することができる。役員会で討議する事項は次の通りとする。

- | | | |
|-----------|---------|-----------|
| 1 予算および決算 | 2 会則の変更 | 3 その他重要事項 |
|-----------|---------|-----------|

第16条 (経費) この会の経費は会員の納める会費およびその他の収入をもってこれに当てる。会費の徴収細則は別に定める。

第17条 (会計年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌3月31日に終わる。

付 則 本則は昭和38年5月25日より施行する。